

「第36回吉田秀和賞」贈呈式 ご取材のお願い

平成2年に創設されました吉田秀和賞は、優れた芸術評論を発表した人に対して賞を贈呈し、芸術文化を振興することを目的として当財団が運営しております。

第36回目となりました今回、審査委員の片山杜秀氏と堀江敏幸氏が、厳正に審査を行ない、**今村信隆氏の『「お静かに!」の文化史 ミュージアムの声と沈黙をめぐる』(文学通信 2024年11月刊)、『「お静かに!」の誕生 近代日本美術の鑑賞と批評』(文学通信 2025年7月刊)**を受賞作品として決定いたしました。

つきましては、賞の贈呈式を下記のとおり開催いたしますので、ご多用のところとは存じますが、ご取材くださいますようお願い申し上げます。

記

日時： 令和8年10月24日(土)13時～14時
(プレス受付：12時30分～)
会場： 水戸芸術館 会議場
内容： 表彰状の授与／講評／受賞者あいさつ ほか
受賞者： 今村 信隆 (いまむら・のぶたか)
肩書き： 北海道大学教授



「吉田秀和賞について」は別紙をご参照ください。

〔著者略歴〕

北海道大学大学院文学研究院教授。放送大学客員教授。

1977年、北海道生まれ。北海道大学文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。

民間のバス会社で働いた後、札幌芸術の森美術館に勤務。その後、京都造形芸術大学(現・京都芸術大学)准教授、甲南女子大学准教授等を経て、現職。単著に、『一七世紀フランスの絵画理論と絵画談義』(北海道大学出版会、2021)、『「お静かに!」の文化史—ミュージアムの声と沈黙をめぐる』(文学通信、2024)、『「お静かに!」の誕生—近代日本美術の鑑賞と批評』(文学通信、2025)、編著に、今村信隆編『博物館の歴史・理論・実践1～3』(芸術学舎、2017-2018)、今村信隆監修『文学館を旅する』(イカロス出版、2025年)、共編著に『学芸員がミュージアムを変える!—公共文化施設の地域力』(水曜社、2021)、『プラス・ミュージアム—地域文化資源としての博物館論』(水曜社、2026)などがある。



【お問合せ】

公益財団法人水戸市芸術振興財団 吉田秀和賞担当 太田朝里

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL 029-227-8111 FAX 029-227-8110

《取材申し込み》

10月22日(木)までにFAXまたは電話でお申し込みください。

FAX. 029-227-8110

【御社名】

【御芳名】

人数

名

【連絡先】TEL.

「吉田秀和賞」について

吉田秀和賞は音楽を中心に芸術評論に多大な功績のあった吉田秀和氏の名を冠し、平成2年に創設されました。音楽・演劇・美術などの各分野で優れた芸術評論を発表した人に対して賞を贈呈し、芸術文化を振興することを目的として公益財団法人水戸市芸術振興財団が運営しております。

■ 正賞 表彰状

■ 副賞 賞金 200万円

■ 審査委員

片山 杜秀 (評論家・慶應義塾大学法学部教授)

堀江 敏幸 (作家・早稲田大学文学学術院 文化構想学部教授)

■ 歴代審査委員

審査委員長

吉田 秀和 平成2年(1990年)12月16日～平成24年(2012年)5月22日

杉本 秀太郎 平成24年(2012年)6月30日～平成27年(2015年)5月27日

審査委員

加藤 周一 平成2年(1990年)12月16日～平成20年(2008年)12月5日

武満 徹 平成2年(1990年)12月16日～平成8年(1996年)2月20日

林 光 平成8年(1996年)6月21日～平成24年(2012年)1月5日

磯崎 新 平成27年(2015年)9月17日～令和4年(2022年)12月28日

主催：公益財団法人水戸市芸術振興財団

協賛：(株)アダストリア、サントリーホールディングス(株)、(株)常陽銀行、(株)吉田石油

■ 吉田秀和賞 受賞作品一覧 (平成3年度～令和6年度 全34回)

第1回(平成3年度) 秋山邦晴『エリック・サティ覚え書』青土社 1990年6月刊

第2回(平成4年度) 持田季未子『絵画の思考』岩波書店 1992年4月刊

第3回(平成5年度) 該当作品なし

第4回(平成6年度) 渡辺保『昭和の名人 豊竹山城少掾』新潮社 1993年9月刊

第5回(平成7年度) 松浦寿輝『エッフェル塔試論』筑摩書房 1995年6月刊

第6回(平成8年度) 長木誠司『フェルッチョ・ブゾーニ』みすず書房 1995年11月刊

第7回(平成9年度) 伊東信宏『バルトーク』中央公論社 1997年7月刊

第8回(平成10年度) 該当作品なし

第9回(平成11年度) 青柳いづみこ『翼のはえた指 評伝 安川加壽子』白水社 1999年6月刊

第10回(平成12年度) 小林頼子『フェルメール論 一神話解体の試み』八坂書房 1998年8月刊

小林頼子『フェルメールの世界 17世紀オランダ風俗画家の軌跡』

日本放送出版協会 1999年10月刊

- 第11回（平成13年度） 加藤幹郎『映画とは何か』みすず書房 2001年3月刊
- 第12回（平成14年度） 該当作品なし
- 第13回（平成15年度） 岡田温司『モランディとその時代』人文書院 2003年8月刊
- 第14回（平成16年度） 湯沢英彦『クリスチャン・ボルタンスキー 死者のモニュメント』水声社 2004年7月刊
- 第15回（平成17年度） 宮澤淳一『グレン・グールド論』春秋社 2004年12月刊
- 第16回（平成18年度） 有木宏二『ピサロ／砂の記憶 ―印象派の内なる闇』人文書館 2005年11月刊
- 第17回（平成19年度） 該当作品なし
- 第18回（平成20年度） 片山杜秀『音盤考現学』アルテスパブリッシング 2008年2月刊
片山杜秀『音盤博物誌』アルテスパブリッシング 2008年5月刊
- 第19回（平成21年度） 岡田暁生『音楽の聴き方』中央公論新社 2009年6月刊
- 第20回（平成22年度） 白石美雪『ジョン・ケージ 混沌ではなくアナキー』
武蔵野美術大学出版局 2009年10月刊
- 第21回（平成23年度） 椎名亮輔『デオダ・ド・セヴラック 南仏の風、郷愁の音画』
アルテスパブリッシング 2011年9月刊
- 第22回（平成24年度） 新聞公子『ゴッホ 契約の兄弟 フィンセントとテオ・ファン・ゴッホ』
ブリュッケ 2011年11月刊
- 第23回（平成25年度） 末永照和『評伝ジャン・デュビュッフェ アール・ブリュットの探求者』
青土社 2012年10月刊
- 第24回（平成26年度） 通崎睦美『木琴デイズ 平岡養一「天衣無縫の音楽人生」』 講談社 2013年9月刊
- 第25回（平成27年度） 榎木野衣『後美術論』美術出版社 2015年3月刊
- 第26回（平成28年度） 立花隆『武満徹・音楽創造への旅』文藝春秋 2016年2月刊
- 第27回（平成29年度） 平芳幸浩『マルセル・デュシャンとアメリカ
―戦後アメリカ美術の進展とデュシャン受容の変遷―』ナカニシヤ出版 2016年7月刊
- 第28回（平成30年度） 堀真理子『改訂を重ねる『ゴドーを待ちながら』―演出家としてのベケット―』
藤原書店 2017年9月刊
- 第29回（令和元年度） 沼野雄司『エドガー・ヴァレーズ―孤独な射手の肖像』春秋社 2019年1月刊
- 第30回（令和2年度） 荒川徹『ドナルド・ジャッド―風景とミニマリズム』 水声社 2019年7月刊
柿沼敏江『＜無調＞の誕生 ドミナントなき時代の音楽のゆくえ』
音楽之友社 2020年1月刊
- 第31回（令和3年度） 前田良三『ナチス絵画の謎―逆襲するアカデミズムと「大ドイツ美術展」』
みすず書房 2021年3月刊
- 第32回（令和4年度） 新井高子『唐十郎のせりふ 二〇〇〇年代戯曲をひらく』幻戯書房 2021年12月刊
- 第33回（令和5年度） 藤原貞朗『共和国の美術―フランス美術史編纂と保守／学芸員の時代―』
名古屋大学出版会 2023年2月刊
- 第34回（令和6年度） 鈴木晶『ニジンスキー 踊る神と呼ばれた男』みすず書房 2023年7月刊
- 第35回（令和7年度） 海老根剛『人形浄瑠璃の「近代」が始まったころ：観客からのアプローチ』
和泉書院 2024年8月刊

お問合せ先

公益財団法人水戸市芸術振興財団 吉田秀和賞担当

大津良夫・太田朝里

〒310-0063 茨城県水戸市五軒町 1-6-8

TEL. 029-227-8111 FAX. 029-227-8110

E-mail: kouhou@arttowermito.or.jp